

Title	福沢のみた明治維新
Sub Title	Fukuzawa and the Meiji restoration
Author	中山, 一義(Nakayama, Kazuyoshi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1965
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.5 (1965.) ,p.31- 37
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000005-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福沢のみた明治維新

Fukuzawa and the Meiji Restoration

中山一義

Kazuyoshi Nakayama

慶応四年維新の年を迎えて福沢は数へで三十五歳になった。福沢は六十八歳で明治三十四年に亡くなつてゐるから、ちょうど生涯の半ばに達してゐたことになる。当時の身分は九州中津の奥平藩の藩士であると同時に、数年前から翻訳の仕事をして幕府に召されて旗本のやうなものにもなつてゐた。二十一の歳から洋学を学んで既に十五年、欧米に見聞の旅をすること三度、『西洋事情』その他の著訳によつて、洋学者としての名声は世に高くなつてゐた。開塾以来十年、福沢塾はこの年規模を大にし、組織を改め、慶応義塾と改称した。

明治維新は福沢の生涯に大影響を与えた。福沢は維新を境に、大転換をしてゐる。この影響と転換とはどんなものであつたか。福沢は維新について、深い感慨とすぐれた思想をもつてゐる。これを明らかにするには、福沢を真に理解できない、とわたしは思ふ。できる限り資料に、忠実に、福沢の維新観を一度確かめて見たいと考へてゐた。この論文のねらいはそこにある。

—

福沢の維新観を知るための最も重要な、注目すべき資料は、『中元祝酒之記』である。慶応四年（九月改元で明治元年）の七月十五日、すなはち中元の佳節に因んで、福沢が起草した文章である。慶応四年の七月といへば、戦は東北のかなたに去つて、江戸の町は兵火も収まり、市民はようやく平静をとりもどして、春以来の争乱に事なきを得たことをたがいによるこび合つた頃である。慶応義塾においても、「遇中元、同社手カラ酒肴ヲ調理シ、一杯ヲ挙ケ、文運ノ地ニ墜チサルヲ祝」ふとともに、維新革命の世にあつて静かに講学にいそむ社中の心意

気を、天下に公言したのがこの文章である。

この記の資料としてのおもしろさは、維新争乱の最中に、福沢自ら意識的にこれをうけとめ、これに対する自分の態度をはつきり表明してゐるところにある。つまり、生のままの維新観がうかがへるところにある。その全文は下の通りである。

中元祝酒之記

西洋事情外篇ノ初篇ニ言ヘルコトアリ人若シ其天与ノ才力ヲ活用スルニ当テ心身ノ自由ヲ得サレハ才力共ニ用ヲ為サス故ニ世界中何等ノ国ヲ論セス何等ノ人種タルヲ問ハス人々身自ラ其身体ヲ自由ニスルハ天道ノ法則ナリ即チ人ハ其人ノ人ニシテ猶天下ハ天下ノ天下ナリト言フカ如シ其生ルハ東縛セラルコトナク天ヨリ附与セラレタル自主自由ノ通義ハ売ル可ラス亦買フ可ラス人トシテ其行ヲ正フシ他ノ妨ヲ為スニ非サレハ云々ト

春来国事多端遂ニ干戈ヲ動カスニ至リ帷幄ノ士ハ内ニ焦慮シ干役ノ兵ハ外ニ曝骨シ人情恟々延テ今日ニ至ル於世ノ士君子或ハ筆ヲ投テ戎軒ヲ事トスルアリ或ハ一書生タルヲ倦デ百夫ノ長タラントスルアリ或ハ農ヲ廢シテ兵タル者アリ商ヲ転シテ士タル者アリ士ヲ去テ商ヲ営ム者アリ事緒粉粉論喋々亦文事ヲ願ルニ違アラズ嗚呼是革命ノ世ニ邁ル可カラサル事変ナル可キノミ此際ニ当テ独我義塾同社ノ士固ク旧物ヲ守テ志業ヲ変セス其好ム所ノ書ヲ読ミ其尊フ所ノ道ヲ修メ日夜茲ニ講究シ起居常時ニ異ナルコトナシ以テ悠然世ト相居テ遠近内外ノ新聞ノ如キモコレヲ聞クラ好マズ唯自信シ自樂シ其道ヲ達スルニ汲

々タレハ人亦コレニ告クルニ新聞ヲ以テスル者少ク
 世間ノ事態亦何様タルヲ知ラス社中自ラ此塾ヲ評シ
 テ天下ノ一桃源ト称シ其景況全ク世ト相反スルニ似
 タリ然リト雖モヨク事理ヲ詳シ其由ル所其安スル所
 ヲ視察セハ人各其才ニ所長アリ其志ニ所好アリ所好
 ハ必ス長シ所長ハ必ス好ム今天下ノ士君子専ラ世事
 ニ執掌シ干城ヲ事トスルモ或ハ止ムヲ得サルニ出ル
 ト雖モ自ラ其所長所好ナカラサルヲ得ス故ニ彼ノ士
 君子モ天与ノ自由ヲ得テ其素志ヲ施スモノト云フ可
 シ又我党ノ士幽窓ノ下ニ居テ秋夜月光に講究スルコ
 ト旧日ニ異ナルナキヲ得テ修心開知ノ道ヲ樂ミ私ニ
 濟世ノ一斑ヲ達スルハ豈亦天与ノ自由ヲ得ルモノト
 言サル可ケンヤ然ラハ則我輩ノ所業其形世情ト相反
 スルニ似タリト雖モ其実ハ共ニ天道ノ法則ニ從テ天
 賦ノ才力ヲ用ユルノ外ナラサレハ此彼ノ間毫モ相戻
 ルコトナン前日ノ事既ニ己ニ斯ノ如シ後日ノ事亦將
 ニ斯ノ如クナルベケレハ我党ノ士自ラ阿ラス自ラ曲
 ケス己ニ誇ルコトナク人ヲ卑ムコトナク夙夜業ヲ勉
 テ天ノ我ニ与フル所ノモノヲ慢ニスルコトナクハ
 豈唯社中ノ慶ノミナラン抑モ天ノ此文ヲ喪サ、ルノ
 深意ナル可シ本日遇ニ中元同社手カラ酒肴ヲ調理シ
 一杯ヲ挙ケ文運ノ地ニ墜サルヲ祝ス

慶応四年戊辰七月

慶応義塾同社誌

亡き人の霊を供養する盂蘭盆の法要とならんで、七月十五日を中元の佳節として、親戚知友たがひに、半歳生存の無事を祝ふことは、江戸中期ころからの習俗である。義塾社中もたまたまこの習はしにしたがつて、祝酒の宴を催したものであろう。

本文の第一節は、『西洋事情外篇卷之一』中、「人生の通義及び其職分」からの引用であって、抜粋の部分の前には、「天より人に生を与れば、又従て其生を保つ可きの才力を与ふ。然れども」とあり、後には、「国法に於ても其身の自主自由を奪取ること能はず。今給料を受けて人に奉公する者は、或は其身不自由なるに似たれども、其実は然らず。奉公の人にても其身体は其人の身体にて、煩勞の代には給料を受け、一身の処置を為すに他より之を問然する者あることなし。○右所述の自由の趣意は、国の制度に於て許す所にて、これを人民普通の自由と名く。」とある。現代風に言へば、基本的人権と自由の本義を説いてゐるのである。たゞ上の文中、「人ハ其人ノ人ニシテ猶天下ハ天下ノ天下ナリト云フガ如シ」といふ文句と、類似の文章が、『呂氏春秋・貴公篇』にも見出される。(大公望撰『六韜・天師』にもあるといふ。)

呂不韋は秦の始皇の天下を家とするやり方に反対して、「天下不非一人之天下、天下之天下也。」といった。中国には古来自由と平等の思想の伝統があり、これはそれを代表してゐるのである。福沢は恐らくこれを活用して、「人は其人の人にして、猶天下は天下の天下なりと云ふが如し」と書いたのであろう。中国の天下思想を援用して、十八世紀風の西洋の自由平等の権利思想を紹介することを思ひついたのであらう。

さて、『中元祝酒之記』の第二節に入ると、前後二段にわかれる。「社中自ラ此塾ヲ評シテ天下ノ一桃源ト称シ、其景況全ク世ト相反スルニ似タリ」までを前段と見て、以下を後段とする。

春以来日本中が敵味方に分れて闘ひ、遂に江戸は戦場となり、武器を取つてこれに加はるもの次第に多く、人々文事を顧るに暇なき有様であるが、これは革命の世には避けることのできない事態でやむをえない。併し、この際に義塾社中は平常通り所好の書を読み、所長の道を講究して、戦ひその他のさわがしいニュースは一切うけつけず、社中自ラ塾を評して別天地の桃源境と称してゐる。しかし、一方に命がけて何かの爲めに戦つてゐるのに、文事にたづさはつてゐてよいものか。この疑問に対する福沢の解答が、後段の文章である。

主義思想を異にするものが、骨肉相殺し、知友相闘つてゐるのに、悠然と書を読み、真理を究明してゐるものの立場をどう辯護し正当化するか。同じ市中の戦闘に剣戟の音を聞き、砲煙を遠く望みながら、福沢が考へた理屈は、第一段の天賦の自由の思想を根拠としたものである。人各々所好所長を異にする。長するところは好み、好むところは長ずる。主義のために闘つてゐる士君子の中には、止む得ざるに出づる者もあるが、多くは、それが所好であり、所長であるからであらう。いはば彼等は天与の自由を得て、その意志をつらぬいてゐるものといふべきである。これと対照的に、慶応義塾社中が平和な時と変りなく静処にあつて学問にいそしみ、ひそかに世の爲に尽すところあらんとしてゐるのも、また、天与の自由を得てゐるものといはざるをえぬ。彼と此と外見は違つてゐても、ともに自然の道理に従つて天与の才を活用してゐるのであるから、その間すこしの優劣是非の差はあるはずはない。といふのが、福沢の解答である。

以上のやうなわけであるから、社中は世に阿つたり、志を曲げたりすることなく、大いに自重して、学業にはげみ、天与の才を大切に育て上げなければならぬ。それは、社中一同のよろこびであるばかりでなく、学問をほろぼすまいとする深い「天の意志」でもあるであらう。

このやうに書いて、一面においては社中をいましめ、他面においてはげましてゐるのである。

ところで、「抑モ天ノ此文ヲ喪サ、ルノ深意ナル可シ」といふ文章は、『論語・子罕篇』にある記事から出てゐるらしい。それによると、孔子が匡といふところで、あやうく殺されさうになつた時、学問即ち文の担ひ手である自分を天が見殺しにするはずがない、と確信を以ていつた言葉、「文王既に没す。文、茲に在らざらんや。天の將に斯の文を喪ばさんとするや、後死の者、斯の文に与かることを得ざる也。天の未だ斯の文を喪ばさざるや、匡人其れずれを如何せん。」この言葉から来てゐるらしい。して見ると、そこには、深い自信のほどを読みとるべきであると同時に、その使命感の強さをも感じとるべきであろう。

二

第二の資料は『文明論之概略』である。明治八年四十二才の時の著である。福沢はその第五章「一国人民の智徳を論ずの統」の中で、当時流行の文明史の立場から、明治維新に学問的解釈を加へてゐる。

福沢はこの書を著はすのに、方法の上で、バックルの『英国文明史』を参考にしたといはれてゐるが、バックルはコントの英国における門人で、コント流の実証を歴史の上に生かした人である。フランス革命の思想的原因である啓蒙思想のもたらした革命後の混乱と無秩序におちいつた社会を、確実な実証的知識によつて救済しようといふのが、コントのねらひであつた。コントは実証によつて得た知的予見 *prevoyance* が行動を正しく指導することを説いた。この理論を歴史に生かして、当時大きな印象をあたへたのがバックルであつた。バックルは国民生活に関する自然法則を探りだすことを歴史学の課題とし、それには統計的數字に表明されたゆるやかな社会的諸変化を明らかにすることによつて、有用にして且つ精確な知識を所有することができると説いた。(ウインデルバンド『一般哲学史』第七編第十五節自然と歴史)。ところで、バックルは統計的法則をある種の現象を説明する準則とは見ないで、むしろ現象を引き出す力、または、行動をうながす原因であるかの如く見てゐるらしい、といつて批難する人もあるが、(カッソーラー『人間』第二編第十章歴史)、バックルにはたしかに自由意志の否定にまで行きかねないところがあるが、統計の歴史現象研究に対する大きな価値は、勿論否定しえない。統計的方法はその性質上当然集団現象に局定さるべきであることはいふまでもない。福沢はこの点を『文明論之概略』に

において、節度を保つて正しく活用してゐるやうに思はれる。

一国の文明を論ずる際に、国民一般に分賦してゐる智徳を一体として研究の対象とする。福沢はこれを衆論と呼んでゐる。「此衆論を以て人心の在る所を窺ふ」ことができるが、衆論については、ここに一つの理論がある。「衆論は必ずしも人の数に由らず、智力の分量に由て強弱あり」といふ理論である。

人の智徳を酒^{アルコール}精にたとへれば、ある種の人物十人を蒸溜して、智徳の量、一斗を得たのに対し、他の種の人物は百人を蒸溜して僅に三合しかとれない。この場合、十人の意見が集団の意見を支配する。それは、「其量を以て人数の不足を補ひ、遂に衆論の名を得たるもの」であると、福沢は説明してゐる。

この理を以て、福沢は明治維新前後の歴史の動向を解説する。維新によつて新政府ができ次第で廢藩置県が行はれ、華士族はために権力も利禄もともに失つたけれども、敢て不平を唱へることのできないのは何故か。また、「王政一新は王室の威光に由り、廢藩置県は執政の英断に由て成りしものなり」などといふ人もあるが、それは時勢を知らぬ者の臆断であつて、早くそれらが成立せず、慶応の末年になつてはじめて維新が成立し、次で廢藩となつたのには、王室の威光や政治家の英断以外に、別に其の原因がなければならぬ。それは何か。

これらの設問に対して福沢は政府の専制力と人民の智力とのバランスの変動論を以て答へてゐる。旧時代の政府専制ならびに門閥権力の強大と、人民の智力の弱少とは力の釣合が全くとれなかつたが、天明文化の頃から人民の智力は漸く増量しはじめ、嘉永年間ペリ渡来をきっかけとして、政府が外交の事に示した失敗を見てその愚弱なるを知り、一方外国の事を見聞して、その力を増強し、鬼神の如き政府と雖ども人力を以てこれを倒す可きを悟るに至つた。それはあたかも、聾盲が急に耳目を開いて始めて声色を聞見しうるのを知つたのと似てゐる。以上が福沢の力のバランス変動論である。

次で、福沢は、勢を得た人民の勢力が、まず維新革命を成立させ、次で廢藩を成功させ、さらに、時勢を進展させるために、二転三転と変貌する有様を叙述している。

「始て事の端を開きたる者は攘夷論なり」と福沢はいふ。人民の智力は、はじめ攘夷論といふかたちで登場する。福沢は攘夷論がどうして生れ、どんな性格をもつた思想であるかを、次のやうに述べてゐる。「抑も此議論の発する源を尋るに、決して人の私情に非ず、自他の別

を明にして自から此国を守らんとするの赤心に出ざるはなし。開關以来始て外国人に接し、暗黒沈静の深夜より喧嘩騒動の白昼に出たるものなれば、其見る所の事物悉く皆奇怪にして意に適するものなし。其意は即ち私の意に非ず、日本国と外国との分界をば僅に脳中に想像して、一身以て本国を担当する意なれば、之を公と云はざるを得ず。固より暗明頓に変じたる際に当り、精神眩惑して其議論に条理の密なる者ある可らず、其挙動も亦暴にして愚ならざるを得ず。既して云へば、報国心の粗且未熟なる者なれども、其目的は国の為なるが故に公なり、其議論は外夷を攘ふの一箇なるが故に単なり。公の心を以て単一の論を唱れば、其勢必ず強盛ならざるを得ず。是即ち攘夷論の初に権を得たる由縁なり。世間の人も一時に之に籠絡せられ、未だ外国交際の利を見ずして先づ之を悪むの心を成し、天下の悪尽く、外国の交際に帰して、苟も国内に禍災の生ずるあれば、此も外人の所為と云ひ彼も外人の計略と称し、全国を挙て外国交際を悦ぶ者なきに至れり。仮令ひ私に之を悦ぶ者あるも世上一般の風に雷同せざるを得ず。」以上は、近代ナショナルリズムの対外興奮の一面の心理と論理とを要約した名文章である。

上の文中、「其目的は国の為なるが故に公なり、其議論は外夷を攘ふの一箇なるが故に単なり。公の心を以て単一の論を唱れば、其勢必ず強盛ならざるを得ず。是即ち攘夷論の初に権を得たる由縁なり」といふ通り、攘夷は一時強盛で、幕府を窮地に追ひつめた。幕府の立場は微妙であって、攘夷派と外国人との中間に介在して益々弱体を暴露したかに攘夷派の眼には写つた。外交の事に當つてみた幕府の有司にはそれなりの言ひ分があつたであらうが、攘夷派には、それが却つて因循姑息と受けとれた。この頃から討幕論が攘夷論に結びついた。攘夷を討幕の口実のみと見るのは誤りで、攘夷が近代ナショナルリズムの一面として思想的独立をたもつた時期はすでにあつたのである。それが討幕と結びついたのは、内外状勢の急転回がさせたもので、その際にはさらに復古尊王がそれからみ合つた。このやうにして、「結局幕府を殲すの目的に至ては衆論一に帰し、全国の智力悉く此目的に向て慶応の末年に革命の業を成し」とげたのである。この成行に従へば、当然革命復古の後には攘夷を実行すべき筈であるに却てその事なく、また幕府を殲してしまへば止む可き筈なのに進んで廢藩を断行し家禄を処分して大名士族をやめたのは、どういふわけか。福沢はこの疑問に答へて曰く、「蓋し偶然に非ざるなり。攘夷論は唯革命の嚆矢にて、所謂事の近因なる者のみ。一般の智力は初より赴く所を異にし、其目的は復古にも非ず、

又攘夷にも非ず、復古攘夷を先鋒に用ひて旧来の門閥専制を征伐したるなり。故に此事を企たる原因は国内の智力なり。之を事の遠因とす。此遠因なる者は開港以来西洋文明の説を引て援兵を為し、其勢次第に強盛に赴くと雖ども、智戦の兵端を開くには先鋒なかる可らず、是に於てか近因と合して其戦場に向ひ、革命の一挙を終て凱旋したるなり。先鋒の説も一時は勇氣を發したれども、凱旋の後に至ては漸く其結構の粗にして久を持すること能はざるを知り、次第に腕力を棄てて智力の党に入り、以て今日の勢を成せり」と。

これを要するに、福沢は維新の歴史を専制と智力との闘争のプロセスと見てゐるのである。国内一般の智力の生長がこの歴史を動かす遠因であり、智戦の主力であつて、その目的とするところは専制の廢止にあり、そのためには攘夷を先鋒とし、西洋文明を援兵とし、復古も廢藩も、その目的を達する一步二歩たるに過ぎぬ、といつてゐるのである。だから福沢は、「王制復古は王室の威力に抱るに非ず、王室は恰も国内の智力に名を貸したるものなり。廢藩置県は執政の英断に非ず、執政は恰も国内の智力に役せられて其働を実に施したる者なり」と道破してゐる。

福沢はさらに、智力を以て維新を成功させた歴史の動きを統計的数字を以て説明してゐる。

福沢によると、当時の日本の総人口はおよそ、三千万で、その内農工商の数は二千五百万、士族は僅に二百万足らずであるが、儒医神官僧侶浪人の類をも合せて之を士族とみると、およそ華士族は五百万である。昔から日本の風として平民の中からは国事に関するものは出ない習であるから、智力によつて衆論をリードするものは士族の五百万の中から出たと見る。しかも、この五百万の中でも改革を好む者は甚だしい。第一に「好まざるの甚だしきものは華族」であり、次で大臣家老、次で大祿の侍である。これらは皆改革によつて損をする者だから好む筈がない。これを好む者は、「藩中にて門閥なき者か、又は門閥あるも常に志を得ずして不平を抱く者か、又は無位無祿にして民間に雑居する貧書生か」いづれにしても事あれば得をして損なき身分の者である。概していへば「改革の乱を好む者は智力ありて銭なき人」たちである。福沢は「古今の歴史を見てこれを知る可し」といつてゐる。この輩の者は士族五百万の内僅に十分の一にも達しまい、と福沢は推計してゐる。

幕府を倒し王政を建てた衆論生長伝播の趣を、福沢は次のやうに描写してゐる。「何処より發したるとも知れ

ず、不図新奇なる説を唱へ出して、何時となく世間に流布し、其説に應ずる者は必ず智力遅しき人物にて、周囲の人は之がために説かれ之がために劫され、何心なく雷同する者もあり、止むを得ずして従ふ者もありて、次第に人数も増し、遂に此説を認めて国の衆論と為し、天下の勢を圧倒して鬼神の如き政府をも覆したることなり」と。

さらに、廢藩置県のこと、士族一般にとつては家禄を一時に失ふ不利の筈であるのに、衆論の力がこれを断行せしめた有様を説明して福沢は云ふ。「之を好まざる者は十に七、八、この説を主張する者は僅に二、三なれども、其七、八の人数は所謂古風家にて、此党の間に分賦せる智力は甚だ乏しく、二、三の改革者流の有する智力に及ばざること遠し。古風家と改革家と其人数を比較すれば七、八と二、三との割合なれども、智力の量は此割合を倒にしたるが如し。改革家は此の智力の量を以て人数の不足を補ひ、七、八の衆人をして其欲する所を逞ふせしめざりしのみ」と。

維新史における復古廢藩のいきさつを、数字を以て説明する福沢の論法は以上の如くであるが、明治七、八年頃の古風、改革両家の心理の動向を、さらに福沢は次のやうに述べてゐる。「目今の有様にては、真に古風家と称す可き者も甚だ少なく、旧士族の内に其禄位の保つ可き議論を立る者もあらず、和漢の古学者流も半は既に其説を変じ、或は牽強附会なる論を作て私に自家の本説を装ひ、体面を全ふして改革家の党に混同せんと欲する者もあり。之を譬へば和陸を名にして降参を謀る者の如し。固より其名は和陸にても降参にても、混同の久しきに至れば遂には実の方向を同ふして、共に文明の路に進む可きが故に、改革家の党は次第に増す可しと雖ども、其初め事を企て、これを成したるは人数の多きがために非ず、唯智力に由て衆人を圧したるなり。今日にても古風家の党に智力ある人物を生じて、次第に党与を得て盛に古風を唱ることあらば、必ず其党に勢を増して改革家も路を避くることなる可しと雖ども、幸にして古風家には智力ある者少なく、或は遇ま人物を生ずれば忽ち其党に叛きて自家の用をば為さざるなり」と。福沢の明眼が明治十年代の古風反動の抬頭を予想してゐるかの如くでもあり、また、福沢の樂觀と文明への確信が、これを軽視してゐるかの如くでもある。

三

第三の資料は『福翁自伝』中の「王政維新」の項である。明治三十一年（五月脱稿）六十五才の福沢は、三十

年の昔を追想して、維新前後の自己の体験を省察してゐる。三十年の歳月のへだたりは、福沢をして当時の自己の心理の明暗を、すなほに且つおほらかに語らせてゐる。したがつて、それは個人の心理に映じた維新史の一面を率直に伝へてゐる。この意味では、『文明論の概略』の維新観とは性質の全くちがつた資料としての価値がある。

自己を語ることに於いて『福翁自伝』に優るものはあまりあるまい。自叙伝に自我が出るのは当然だが、『福翁自伝』のはすこしもいやらしきがない。おほらかで、率直で、明るく留滞がない。これは福沢の人格の自然の流露であらう。自己を語りつくして、しかも、あと味がわるくない、といふ自叙伝は少いものだ。

第一に、維新前後の攘夷が、福沢の眼にどう写つたか。攘夷といふ点では、所謂尊攘派も幕府も同じ穴の狸と貉に見えたらしい。若い頃から洋書を読み、三度も欧米見聞をして来た福沢は、「ドウしても対外国是は斯う云うやうに仕向けなければならぬと、ボンヤリした処でも外国交際法に気の付く」のは当然で、福沢の眼から見ると、「日本国中の輿論は都て攘夷で、諸藩は残らず攘夷藩で、徳川幕府」も表てはとにかく、腹の内は攘夷だと思つた。「大老井伊掃部頭は開国論を唱へた人であるとか、開国主義であつたとか云ふやうな事を、世間で吹聴する人もあれば、書に著した者もあるが、開国主義なんて大嘘の皮、何が開国なものか、存じ掛りもない話だ。」「唯其徳川が開国であると云ふのは、外国交際の衝に當つて居るから、余儀なく時々開国論に従つて居た丈けの話で、一幕捲つて正味の楽屋を見たらば、大変な攘夷藩だ。こんな政府に私が同情を表はすことが出来ない」と云ふのも無理なからう。」「表面は開国を装ふて居るも、幕府は眞実自分も攘夷が為たくて堪らないのだ、逆もモウ手の着けやうのない政府だと、実に愛想が尽きて同情を表はす気がない。」以上が福沢の幕府観であつた。

それでは、幕府を倒して、これに取つて代らうといふ勤王はどうかといふに、「彼等が代つたら却てお釣の出るやうな攘夷家だ。コリヤ又幕府よりも一層悪い。」と、福沢はこれも攘夷ときめつける。

「勤王攘夷と佐幕攘夷」といふ名を福沢は付けて雙方の非を攻撃してゐる。両者は「名こそ変れ、其実は雙方共に純粹無雜な攘夷家で、其攘夷に深淺厚薄の別はあるも、詰る所は雙方共に尊攘の仕振りが善いとか悪いとか云ふのが争論の点で、其争論喧嘩が遂に上方の攘夷家と関東の攘夷家と鉄砲を打合ふやうになるであらう」といふのが福沢の予想で、それはやがて適中した。

ことに福沢の嫌つたのは、上方の攘夷家の乱暴であつた。不文不明の輩ときめつけてゐる。彼等は、「事実には於て人殺しもすれば放火もしてゐる。其目的を尋ねて見ると、仮令ひ此国を焦土にしても飽くまで攘夷をしなければならぬと云ふ触込みで、一切万事一挙一動悉く攘夷ならざるはなし。然るに日本国中の人々がワツとソレに応じて騒ぎ立て居るのであるから、何としても之に同情を表して仲間になるやうな事は出来られない。是こそ実に国を滅す奴等だ。こんな不文不明な分らぬ乱暴人に国を渡せば亡国は眼前に見へる。情けない事だと云ふ考が始終胸に染込んで居たから、何として、上方の者に左袒する気にならぬ。」と福沢は云つて、緒方洪庵夫人から上方行きをすゝめられた時も、「私はドウも首をもがれたつて攘夷のお供は出来ません」と断つてゐる。

福沢は同じ頼むに足らずとしても、幕府と勤王家と比較して、何れかに政治をまかすとすれば、勤王家より幕府の方がまだましだといつてゐる。「彼等が代つたら却つてお釣の出るやうな攘夷家だ。コリヤ又幕府より一層悪い。」と見てゐる。福沢は自ら政治には不向きな男と称し、政治論はしないことにしてゐるといひながらも、まれにはこれに触れてゐる。慶応三年の時点で、洋学者仲間の尺振八と快談の折、幕府のやり方を評して、「自分が其局に當つて居るから抛ろなく渋々開国論を唱へて居ながら、其実を叩いて見ると攘夷の張本だ。……そんな政府なら叩き潰して仕舞ふが宜いぢやないか。」と珍らしく福沢は大言壮語し、但し、打毀すのはいいが、「只此処で困るのは、誰が之を打毀すか、ソレに當惑して居る。乃公等は自分で其先棒にならうとは思はぬ。誰が之を打毀すか、之が大問題である。今の世間を見るに、之を毀さうと云て騒いで居るのは、所謂浮浪の徒、即ち長州とか薩州とか云ふ攘夷藩の浪人共であるが、若しも彼の浪人共が天下を自由にするやうになつたら、ソレこそ徳川政府の攘夷に上塗りをする奴ぢやないか。ソレよりもマダ今の幕府の方がマシだ。けれどもどうしたつて幕府は早晚倒さなければならぬ。唯差当り倒す人間がないから仕方なしに見て居るのだ。困つた話ではないか。」と、傍若無人に語つてゐる。

これより数年前、文久二年の時点では、松木弘安と箕作秋坪といふ洋学者仲間と同じく時勢を語り合つた際、福沢が、「ドウダ迎も幕府一手持は六かしい。先づ諸大名を集めて独逸連邦のやうにしては如何」といふと、松木箕作兩人も、「マアそんな事が總かだらう」と賛成してゐる。この頃の福沢は二百俵の米を貰ふて、將軍の御師匠番になつて、「思ふ様に文明開国の説を吹込んで大変革

をさせて見たい」などいふ、政治的な興味がまんざらなわけではなかつた。それを口に出して語ると、松木は手を拍つて、「左様だ左様だ、是れは遣て見たい」といつたという話から推察すると、福沢ははじめ当時の洋学者の政治意見のおほよそがわかる。

福沢が予想してゐるやうに、慶応三年には、上方と関東との間に戦闘のはじまる氣運が濃い。福沢は上方への参加をさそはれても、「首をもがれても不文不明な連中の仲間入りは御免だ」とことわつてゐる。その年の暮には上方で戦争が始まつた。翌慶応四年戦局が江戸に移らうとしてゐる時の江戸城中の様を見て、「迎も本式に戦争など出来る人氣ではなかつた。」と評してゐる。

江戸で戦闘の行はれてゐる時、福沢は慶応義塾に在つて、不偏不党の態度を終始とりつづけた。「それで先づ官軍は存外柔かなものであつて何も心配はない。併し政治上の事は極めて鋭敏なもので、嫌疑と云ふことがあつては是れは容易ならぬ訳けであるから、ソレを明にするために、私は一切万事何も斯も打明けて、一口に云へば、塾も住居も蔽明きにして仕舞ひ、何処を搜した所で鉄砲は勿論一挺もなし、刃物もなければ飛道具もない、一目明白、直に分るやうにしました。始終爾う云ふ身構へにして居るから、私の処には官軍の方の人も颯々と来れば、賊軍の人も颯々と出入して居て、私は官でも賊でも一切構はぬ、何方向つても依怙鼠負なしに扱つて居たから、雙方共に朋友でした。」と福沢は當時を述懐してゐる。夜は塾に寝て、明るくなると市川辺の戦に飛び出して行く者もあつたが、「根ツから構はない。私は其人の話を聞いて、君はソナ事をして居るのか。危ない事だマア止にした方が宜からうと云つたくらゐることである。」といつてゐる。福沢は自分ばかりではない。知友のだれかれに向つて、戦ひを止めることをすゝめてゐる。古川節藏の脱走を思ひ止まらせやうとしてゐる。浜野定四郎を戦を断念させ塾に止まらせてゐる。「官軍と賊軍と塾の中で混り合つて、朝敵藩の病人を看病して居ながら、何も風波もなければ苦味もない。ソナ事が塾の安全だつた訳けでせう。眞実平等区別なし、疑はんとするも疑ふ可き種がない。一方には脱走して賊軍に投ずる者があるかと思へば、一方にはチャント塾に入居る官軍もあると云ふやうな不思議な次第柄で、斯う云ふ事は造つたのぢや出来ぬ。装ふても出来ぬ。私は腹の底から偏頗な考がない。少しも幕府の事を感服しなければ、官軍の事をも感服しない。戦争するなら銘々勝手にしろと、裏も表もなく其趣意で貫いて居たから、私の身も塾も危い所を無難に過したことと思ふ。」この一文を背景に、『中元祝酒の

記』を再読すると、更に感慨を新にする。

このやうに見ると、すべて順調に事がはこんだやうにあるが、福沢の内心に深く入り込むと、維新前後の内外の有様にひそかにこころを痛めてゐる彼の姿を見出す。「其時の私の心事は実に淋しい有様で、人に話したことはないが、今打明けて懺悔ませう。維新前後無茶苦茶の形勢を見て、逆も此有様では国の独立は六かしい。他年一日外国人から如何なる侮辱を被るかも知れぬ、左ればとて全国中の東西南北何れを見ても共に語る可き人はない、自分では勿論何事も出来ず亦その勇氣もない、実に情けないことである。」いよいよ外人が手を出して、勝手乱暴するやうになつたら、自分はよいが、幼い子供達があわれた。耶穌宗の坊主にでもしてはどうか、一命にかけても外国人の奴隷にはさせたくない、などと思案したことがあると告白してゐる。当時の福沢の心の陰影を示す話として見のがせない。このやうな形でも危機を意識してゐたのである。他人には語つたことのない打明話であるといふ。

しかし、「真実落胆したけれども、左りとて自分は日本人なり、無為にしては居られず、政治は兎も角も之を成行に任せて、自分は自分にて聊か身に覚えたる洋学を後進に教へ、又根気のあらん限り著書翻譯の事を勉めて、万が一にも斯民を文明に導くの僥倖もあらんかと、便り少なくも独り身構へした事である。」これが、われわれが知る維新当時の福沢の表て向きの姿である。

福沢は維新によつて成立した明治政府もまた攘夷政府だと思ひ込んでゐた。新政府からの召出を何度もことわつてゐるのも、そのせいであるかもしれぬが、しかし、それよりも、在野人としての自由を大切にしたいからであ

る。「学者を誉めるなら豆腐屋を誉めろ」といふ有名な話も、これに由来する。しかし福沢は、自分の誤認をいさぎよく撤回して云ふ。「私は酷く政府を嫌ふやうにあるけれども、其真实の大体を云へば、前に申した通りドウしても今度の明治政府は古風一天張りの攘夷政府と思込んで仕舞たからである。攘夷は私の何より嫌ひな事で、コナ始末では仮令ひ政府は替つても逆も国は持てない、大切な日本国を滅茶苦茶にして仕舞ふだらうと本当に爾う思た所が、後に至て其政府が段々文明開化の道に進んで今日に及んだと云ふのは、実に難有い目出たい次第であるが、其目出たからうと云ふことが、私には始めから測量出来ずに、唯其時に現れた実の有様に値を付けて、コナ古臭い攘夷政府を造て馬鹿な事を働いて居る諸藩の分らず屋は、国を亡ぼし兼ねぬ奴等ぢやと思て、身は政府に近づかず、唯日本に居て何か勉めて見やうと安心決定したことである。」と。

む す び

評者曰く、「明治の学者には、論あれども策なきものあり、策あれども論に欠けるものあり。而して、双方兼ね備へたるものは極めて稀れなり。福沢はその稀れなるものの第一人者なりといふべし」と。

いま、福沢の維新観をこの評言に照して見ると、『中元祝酒之記』は策の実現を世に公表せるものである。この記の背後には近代私学としての慶応義塾の誕生が在るからである。『文明論の概略』は論の雄なるものである。文明史学の上に立つ維新の実証的考察は、いまでも学問的価値がある。『福翁自伝』は、以上の策・論ともに情意に深く根ざしてゐることを、自ら率直に告白せる稀有の文章である。